

そんな周囲しゅういの状況じょうきょうに流されそうになりながら、壮太そうたは迷いに迷っていた。

「めっちゃしんどそう、ついていけるだろうか。でも、変わるなら今しかない……やっぱ、無理かも。」

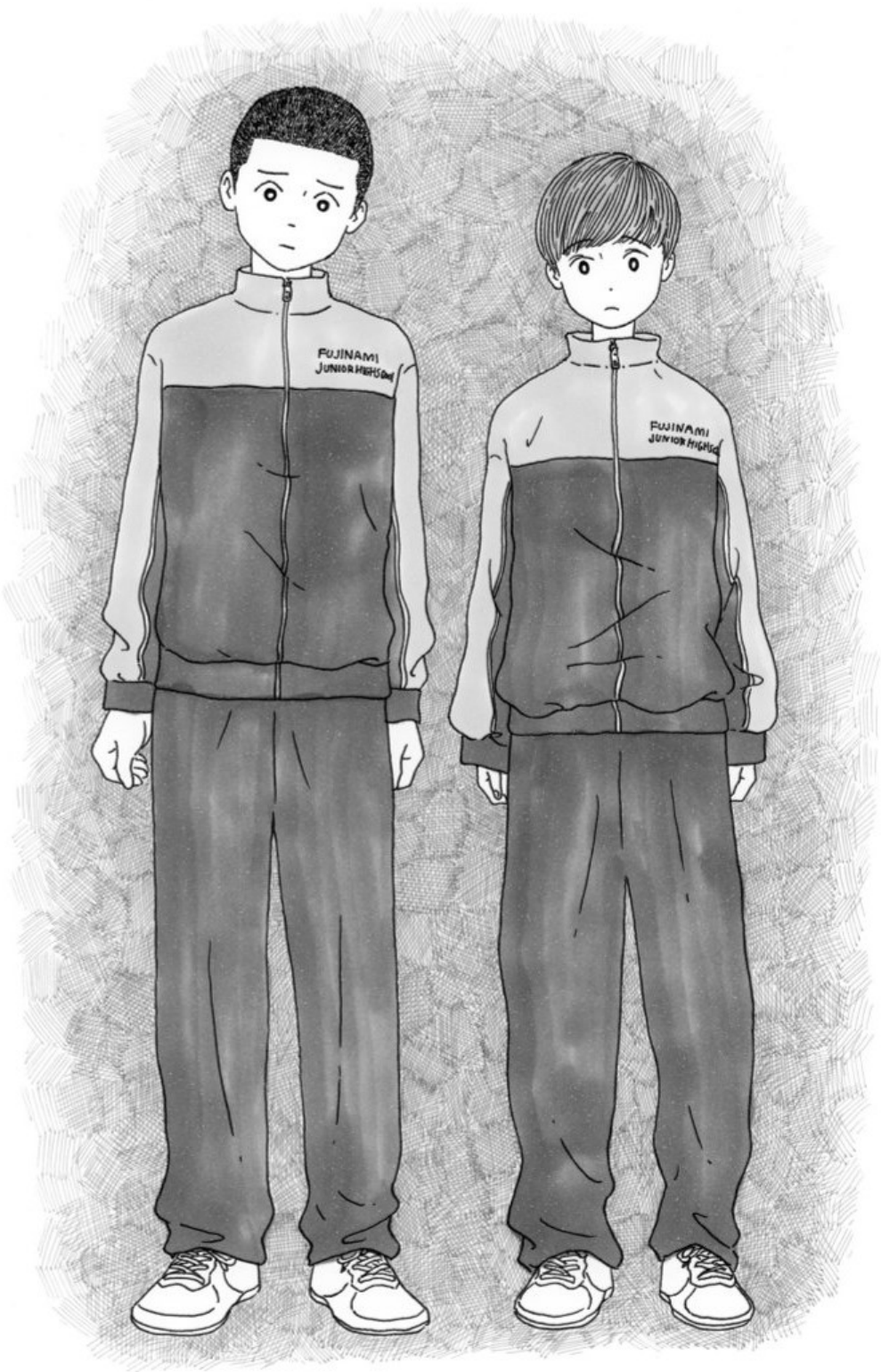
そのとき、残った一年生のもとに鹿島先生かしまが駆けてきた。さわやかな汗あせの匂においが鼻先はなをくすぐる。少し息を切らせていた。え、もしかして一緒にやっていた？ カウチポテト派はの家の父親おとちがとは大違いだ。

「どう？ しんどそうって思った？ でも、中学サッカーでは体力とスタミナが勝負。九十分間ピッチを走り回るだけの基礎体力きそが求められるからね」

体力とスタミナと聞いて、隣となりでカケルがうなだれるのがわかった。

カケルは一反たんもめんみたいうすに薄い。お腹なかなんてぺったんこ。体重も三十数キロしかない。テクニクは抜群ぼつぐんだけど、試合で相手のデイフエンダーふに吹っ飛ばとされるのがよくあった。

「小学生の頃ころはテクニクを身につけるのにとってもいい時期だけど、中学ではなによりも体力づくりを重視じゅうしします」





相賀くんはと見ると、雪柳の枝を目の前にかざしてうなっている。

「木の裏表は枝の色を見るとわかります。日の当たったほうは色が濃い。ほら、こっちが表」

「風花の背後から大河内先生が枝を手に取って教えてくれる。なるほど。そう言われてみるとよくわかった。」

「タイはね、中心になる線だから一番力のありそうな枝を選んで、どんと入れましょう」

「そう言われてもなんのことだかさっぱりわからなくてポカンとしている相賀くんと風花に、先生は手提げ袋をまさぐってカレンダーの裏紙を取り出すとそこにマジックでササッと左にかしいだ線を一本引いた。ただのマジックの線なのに枝に見えてくるから不思議だ。」

「これが、タイ」

線の横に「体」と書き添えた。体って、体育の「体」なんだ。

「そしてユウ。ユウは体の三分の二の長さで、体とのバランスをとりながら花器の反対側に入れます」

添えられた漢字は「用」。これをユウって読むんだ。お花の言葉ってむずかしい。

